島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第31巻　21頁～40頁　平成９年12月

青年期のアイデンティティと自己認知
――看護学生に対する調査を通して――

落合のり子*・堤　雅雄**

Noriko OCHIAI and Masao TSUTSUMI
Identity and Self-Cognition of Adolescence
in the Nursing Students

［キーワード：職業的アイデンティティ、ＳＣＴ、空虚感、自己不一致］
[Key word: vocational identity, SCT, emptiness, self-discrepancy]

Ⅰ　序　論

1　問題陳述

1）女性の青年期とは

（1）青年期のアイデンティティ

自分はいったい何者であるのか、本当の自分を発見したい，けれども簡単にはできないという状況が青年期においてはしばしば見受けられる。「これこそが自分である」という確信を得ようと模索し、そのための試行錯誤が許されるモラトリアムの時期が青年期である。

エリクソン[1]によれば、「これこそが自分である」というこの「自分らしさ」の感覚は，自分はいかなる他者とも異なる独自な見方や行動様式を持つ存在であり、いまここにいる自分は過去から現在そして未来に至るまで一貫して同じ自分であり続けるという感覚である。別の言い方をすれば「これまで育てられてきた自分」「これから自分が生きていきたい自分」「他者や社会から期待されていると感じる自分」という三者を認め、それらを統合することで達成される感覚である。アイデンティティとは自己の連続性や一貫性を土台にして、自分自身が主体的に社会と関わっているという意識のことである。

＊島根県立看護短期大学
＊＊島根大学教育学部心理学研究室

岡本ら[2]は、アイデンティティの形成にとって重要な意味合いをもつ仲間との関わりについて、次のように述べている。「青年期に至ると仲間との関係の中で自分をとらえ、仲間が自分をどのようにとらえているかを基準にして自分を評価するようになる。自分らしく振る舞いたい、しかし他者の信頼も欲しい。自分と仲間の抱く願望や欲求とを、どう折り合わせたらよいのか，どのように調整すればそこに自分という存在を感じ取れるのかと悩むのである。

このように生きていきたい自分を中核に、育てられてきた自分や自分に向けられる社会や他者からの期待に配慮しつつ、さまざま人との関わりの中で『これこそが自分である』という感覚、すなわちアイデンティティが確立されていく。」

（2）職業選択・職業の意味

近年、女性の社会進出が進み、雇用されて働く女性の数が増加している。しかしながら、日本の経済においては「バブル崩壊」後、学生の就職難が続き、特に女子学生を中心に深刻な問題をもたらしている。こうした社会情勢の変化は、それまで就職を将来の「夢」としてとらえていた学生たちにとっては厳しい現実ととらえられるであろう。自立への第一歩である職業の選択に不安な要素を加えるものと考えられる。

アイデンティティの形成過程においては、職業の選択

は大きな課題であるからである。自分の希望や能力の認知と同時に、自分に向けられる社会や他者からの期待は、当然職業の選択にも大きな影響を与えるからである。さまざまな状況を考慮しながら、自分らしさを求めつつ、現実の社会において自分の場所を探すことが必要になる。

（3）女性の進路

職業選択は、まさに自分の生き方を選択することにつながる。しかし、これまで「結婚」や「出産」は女性が働く上でのハンディとされ、女性の就業継続を困難とする大きな要因になってきた。現代の社会は、結婚や出産をしても継続して働きうる環境が整備されつつあるとはいうものの、女性は人生のいろいろな時期にあらためて自分の生き方の選択を迫られることになる。しかし一方では、多様な変化を遂げる現代社会の中で、柔軟に自分らしい生き方を模索し続けることができるとも解釈できる。岡本[2]もいうように、「限られた選択肢の中から自分に合う生き方を選び取っていたかつての女性たちに比べ、今彼女たちの前にはさまざまな生き方が提示されている。それらの中から自らの責任において、自分にふさわしい生き方を選択しなければならない。」現代は、さまざまな人との関係の中で、本当の自分らしい生き方とは何かを模索することが可能な時代である。

2）現代の看護婦が抱える問題

（1）離職

看護のマンパワー不足は深刻な問題であり、看護職員の確保対策が進められる一方で、有能な看護婦をできるだけ職場にとどめ、力を発揮してもらうような定着を促進する対策の検討が必要と言われている。1991年度日本看護協会基本調査[3]によれば、看護婦の在職年数の全国平均は8.2年で、「医療法人・個人」病院では平均5.6年という結果であった。1989年の全国平均が10.0年であったことと比較すると、さらに勤続年数は減ってきている。また、年齢別に見ると、20代ですでに退職を経験しているのはおよそ30％で、退職時の平均勤続年数は5年未満と回答しているのは75.4％であった。

（2）リアリティ・ショック，バーンアウト

勤続年数や離職と言った異動の問題のみならず、一方では若い看護婦達の心の健康もまた注目されている。Kramer[4]は、臨床に出たばかりの看護婦が理想と現実とのギャップからこうした心の健康に障害をきたしているということを「リアリティ・ショック」と名付けた。心の健康の障害は若い看護婦の離職の原因の一つとなっているばかりでなく、たとえとどまっても燃えつき状態に陥るなど、看護ケアの質の低下にも影響を及ぼしてくることが予想される。そこで看護婦の心の健康の維持と回復に焦点を当てて対策を講じることが課題となり、リエゾン精神看護婦の必要性や活動について報告が行われてきた[5]。上泉ら[6]の離職防止対策委員会では、若い看護婦のリアリティ・ショック対策として面接相談活動や質問紙による調査を行った。その結果、燃えつきは自己と外的因子（労働条件、人間関係など）との葛藤が影響している反面、リアリティ・ショックは看護婦個人の内的部分の葛藤であると考えられた。新卒看護婦の燃えつきは「自分のイメージと当該施設の看護婦のイメージの差」、すなわち「理想と現実のギャップ」との相関が認められたのに対し、就業経験のある看護婦の燃えつきは「仕事への期待や満足」の問題と関係していた。また、新卒看護婦は自分のイメージを引き上げることで、理想と現実とのギャップを縮めようとしていることが示唆された。新人看護婦にとって実践的な知識や技術を身につけ、仕事に慣れることが最重要課題であるとされている。

3）看護学生たちが抱える問題

（1）看護職のあるべき姿へのとらわれ

ところで、このように新卒看護婦を悩ませる看護婦の理想像はどのようにして形成されるのだろうか。また、看護学生のアイデンティティはどのように形成されるのか。加藤[7]は、看護基礎教育との関連で、看護婦の看護アイデンティティ形成の脆弱さについて次のように指摘している。「1）基礎的教養の狭小・浅薄さに加え、基礎教科目の自己選択権のなさによって、知的批判力が育っていないことに加え、思考の基礎となる知的興味や関心領域を創れていない。2）『すぐに役立つ実践看護婦の養成』という短期的経営戦略の影響として、成熟を強いられるため、社会的自立は見せかけだけになっている。3）『看護は素晴らしい仕事だ』という教え込まれ過ぎ、べき論的枠組み思考から生じる思いこみの強さや、現実乖離のユートピアなどの影響が指摘できる。」

（2）看護教育の特殊性

看護基礎教育は、なぜ職業的な色彩を帯びることになるのか。看護教育の特殊性について触れてみたい。看護職員は、養成所と学校において養成されているが、准看護婦養成所、看護婦養成所、短期大学、大学間で施設、設備、教員の体制、教育内容等に著しい格差がある。現在も看護婦養成の8割弱は専門学校で行われており、加藤の指摘するように、その教育内容について多くの問題が指摘されている。教育内容を見直し、改善するために、各県に看護大学をというスローガンのもと看護教育の大学化が急速に進められており、平成3年まで日本に11校しかなかった看護大学は、毎年8、9校の割合で増え続け、平成9年には大学52校、短期大学72校となっている。

大学、短期大学の平成９年４月の入学生は、看護婦３年課程１学年養成定員の27.7％を占めている。大学化によって卒業後の学生の進路に多様性が生まれることは想像できるが、大学といえども看護婦養成所として厚生省の指定規則を満たさねばならないため、過密なカリキュラムにならざるを得ないこと、国家試験の合格率や設置主体に関連した就職者の割合が社会的評価として重視されることなどには変わりはなく、今後も学校の在り方として論議されていくと考えられる。現在、厚生省の少子・高齢社会看護問題検討報告書[8]によれば、看護基礎教育の充実として、養成施設を魅力あるものにするため、大学の整備や養成所の教育環境の向上が望まれるとしている。しかし、学生にとって、看護教育の場は、のびのびと自由に学ぶ環境にはなかなかなり得ないのではないかと考える。看護学生の職業的同一性形成について、松下・荒木・木村[9]は、職業的同一性地位の半構成的面接を行った。いずれの同一性地位の看護学生も、入学後学び得たものと自己の能力の間に不適合感を持っていたが、看護教員はこれに対して十分な援助を行えていない実態にあった。加えて、看護教員の早期完了的な関わりが、学生の同一性形成に対して負の影響をもたらしていることが考えられた。

（３）看護学生の精神的健康

このような看護教育の現状の下で、看護学生はどのように学んでいるのだろうか。看護学生の精神的健康状態については近年問題視する報告が見られる。田村・神郡[10]は、精神科実習で適応の問題のあった事例について、１）自己不安、形式的な判断にこだわる人格的未熟さ、２）アイデンティティの危機、モラトリアムの学生に対する看護教師のジレンマ、３）抑うつ傾向、自己否定感情を訴えることができない、ストレス場面での問題解決に対して事なかれ主義的傾向、時には、自己主張や感情表出も重要、４）実習継続が困難、軽い自我の障害を想定、専門的な助言の必要性をあげている。菅原・三條[11]は、実習中のストレスに対する認知の仕方（個人特性）とその個人が用いる対処行動の特徴が、実習後の身体的、精神的健康状態にどのように関連しているかを調査した。精神的健康状況はＧＨＱを、個人特性はＴＥＧを、個人が用いる対処行動は、ＷＣＣＬを用いた。その結果、１）実習終了後の精神健康状態は、非常に悪い傾向であり、２）実習が進むにつれて良くはなるが、半数の学生の精神的健康状態は、あまり良くない傾向にある。３）個人特性を示す自我状態の内、協調性はあるが、自己否定や感情抑制を特徴する順応態度が高いタイプは、精神健康状態が悪く、ストレスがたまりやすい傾向を示した。４）精神健康状態が良い学生は、問題中心対処行動を用い、悪い学生は情動中心対処行動を用いる。看護学生が自覚するストレスの原因は、１）新しい実習経験２）実習記録、宿題３）学生の個人的問題４）臨床スタッフとの問題５）対象との問題６）教員との関係などである。学生が実習を積み重ねるということは、毎回新しい環境の中で、環境との関係と力のバランスを試されていることを意味する、と述べている。

看護学生の精神的健康問題は看護教育の在り方と関係が深く、とうてい学生の個人的努力に頼るだけでは解決しないと考える。看護学生が看護学校を卒業し、社会的に自立していくのを支えるためにも、学生時代の悩み・苦しみを人間としての成長を見守る視点で捉えなおし、学生との関わり方を検討する必要があると考える。

2　研究目的

看護学生が自分をどのように捉え、現実の生活をどう思っているのか、自分の職業について何を考え、周囲の期待をどう受けとめているのかなど、現在の看護学生の実像に迫りながら、精神的健康問題を探っていこうと考える。

3　研究予測

１）看護学生の職業的同一性は、看護教育によって達成方向へと進む。

２）自己認知のずれ（現実と理想、自己と他者など６水準）が大きいほど、空虚感をもたらす。精神的には葛藤のあらわれ、危機状態と捉えることができる。

自己認知のずれの認識が高まると言うことは、人格的な成長のバネになると肯定的にとらえることができる。看護学生は実習等により、自分自身への認識の高まりとともに、現実の社会（医療や福祉の現場など）への認識も高まるという経験をする。このことにより、学生自身がとらえる現実と理想のずれは当然大きくなると考えられるからである。

4　本研究の意義

看護教育が高学歴化し、多様化する時期においては、これまでのような精神主義的な職業教育の傾向から脱皮した新たな看護教育の方向づけがなされなければならない。そのために、学習者の心理を明らかにすることは、

学生への教育的配慮を考えるために重要である。

さまざまな変化のある現代は、女性の職業選択を多様なものにしうる。看護という職業を選択し、進学した学生の心理は、その精神発達の過程で大きく揺れ動いていることが想像できる。学生の成長を見守っていくためには、学生生活と関連づけながら学生の心理状態を考えていくことが必要である。

II　調　査　1

1　方法

「職業的同一性テスト」

第１回目　対象：県立Ａ看護学院１年生26名
　　時期：心理学の授業時間　1993年６月末
第２回目　対象：県立Ａ看護学院１年生33名、２年生35名、３年生32名
　　時期：1994年11月上旬

目的：看護学生の職業的同一性地位について学年別に調査し、継時的変化をみる。

質問紙：中西信夫「自我同一性地位職業についてのカテゴリー選択」

調査方法：中西（1983）の「自我同一性地位職業についてのカテゴリー選択」の質問紙を配布し、５つの文章にそれぞれ「非常によくあてはまる」を５、「全くあてはまらない」を１とした５ポイント尺度で回答を求めた。縦断調査のため、記名式とした。看護学生版ＳＣＴの結果に影響することを考慮し、ＳＣＴがすべて終了した後で職業的同一性テストを実施した。

評定方法１：「非常によくあてはまる」または「かなりよくあてはまる」と回答したカテゴリーをその人の自我同一性地位職業として評価した。いずれのカテゴリーにも「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」と回答した場合は、「その他」のカテゴリーとした。あらかじめ設定した５カテゴリーに対して、「同一性達成」と「早期完了」の２つに「非常のよくあてはまる」「かなりよくあてはまる」と回答した被験者が13名いたので、新たに「同一性達成・早期完了」のカテゴリーを設けて集計した。

評定方法２：各カテゴリーにつけられた数値をそのまま単純集計し、平均値を算出した。これによって、被験者全体の傾向を知ることができる。

ＳＣＴ（看護学生版）

対象：県立Ａ看護学院１年生33名，２年生35名，３年生32名

時期：1994年11月上旬

目的：看護学生の自己概念を個々人の持つ細かなニュアンスを重視しながらとらえる。

（１）ＳＣＴ（看護学生版）の作成

自己意識や自己概念の領域では、自己の現状の認識と規定、自己への感情と評価、過去の自己についてのイメージ、自己の可能性と未来についてのイメージを知るための刺激語を設けた。環境、他者と自己の領域では、他者のイメージと規定、他者からの感情と評価を、目的(生きがい)、人生観の領域では、興味、関心、価値観、人生観、健康観、サポートを知るための刺激語を設けた。

刺激語44をランダムに配列し直し、各項目毎の刺激語が均等になるように２つに分けてpart１、part２とした。その際、比較的回答しやすい刺激語を最初の方へ、回答しにくい刺激語は最後の方へ配置した。(表１)

（２）質問紙の配布方法、配慮したこと

研究者自ら１学年ずつのクラスへ出向き、自己紹介の後、調査の目的や無記名式の調査であること、看護学校の関係者には個別の結果について見せないことなどを説

表１　SCTの刺激語（看護学生版）

PART 1	PART 2
1 子どもの頃、私は	1 家の人は私を
2 私はよく人から	2 わたしを不安にするのは
＊ 3 暇なときは	3 友達
4 私が得意になるのは	＊ 4 27才の頃の私は
5 私の父	5 私が好きなのは
＊ 6 私が安らぐのは	＊ 6 今の若い人は
7 ひとは	＊ 7 勉強
8 私のできないことは	8 私の健康
9 将来、私は	＊ 9 看護婦
10 死は	＊10 私は
11 働くこと	＊11 病気や苦しみ
＊12 女であること	12 もし私が
13 世間	＊13 私にとってつらいのは
14 私が嫌いなのは	＊14 人とつきあうのは
15 時々、私は	15 私の母
＊16 人のために尽くすこと	16 もう一度やり直せるなら
17 私が心をひかれるのは	＊17 今、一番大切に思うのは
＊18 病院	＊18 学校は
＊19 ひとりぼっちになるこ	19 恋愛
＊20 私が信頼できる人は	＊20 私が頼りにするのは
＊21 私が気になること	21 どうしても私は
＊22 わたしの不満は	22 私が努力しているのは

＊印　新項目

明して協力を求めた。所用時間は約40分間であった。調査の間は、教室内で被験者の記述の妨げにならぬよう気を配りながら、観察した。

「Self-differential尺度」

対象：県立Ａ看護学院１年生31名、２年生34名、３年生30名
時期：1994年11月下旬
目的：看護学生の自己評定

（１）作成方法

長島ら[12]、[13]のSelf-differential尺度（一般用）を基本にし、看護の教科書に表現されている看護・看護婦・看護援助イメージ、ＳＣＴの刺激語「看護婦」の結果、若林ら[14]の「看護婦」イメージを参考にした。Self-differential尺度（一般用）は６因子69対の尺度が検討されている。まず、各因子毎で因子負荷量の高い30項目を選択した。次に、看護職的な表現を除き、意味の重複を避け、各因子毎と全体のバランスを考慮して20項目を選択した。さらに、逆転項目を約３割程度配して両極性項目を単極性項目にし、ランダムに順序を並び替えた。

Ａ　看護の教科書に記入されている看護、看護婦、看護援助に関する形容詞を検討した。参考にしたのは、現在出版されている主な看護の教科書「看護学総論」３種（日本看護協会出版会、メヂカルフレンド社、金平出版）である。（　）内は出現頻度

適切な(15)、真の(12)、専門的な(９)、すぐれた(９)、科学的な（８）、(人間性) 豊かな（７）、より良い（７）、信頼できる（７)、高度な（７)、積極的な（７)、高い（７)、安全な（６)、正しい（６)、必要な（６)、合理的な（５)、あたたかい（５)、共感的な（５)、重要な（５)、直接的な（５)、的確な（５)、独自な（５)、効果的な（４)、教育的な（４)、細やかな（４)、心のこもった(４)、正確な(４)、きびしい(４)、成熟した(４)、複雑な(４)。看護婦イメージを直接表現するものは少なく、看護援助行為（結果）を表現したものの方が多かった。ネガティブな表現はほとんどなかった。

Ｂ　ＳＣＴの刺激語「看護婦」で記入された形容詞を検討した。（　）内は出現頻度

大変な(28)、やりがいのある（９)、すばらしい（５)、つらい（４)、誇るべき（４)、頭の良い（３)、すごい（３)、むずかしい（３)、学べる（３)、(仕事が) きびしい（３)、親しみのある（３)、あこがれの（２)、完璧でない（２)、すてきな（２)、責任のある（２)、やさしい(２)。１年生はあこがれをもった表現が多かったが、２年生では現実的で否定的な表現が増え、３年生では現実をふまえた理想像の表現が特徴的だった。

Ｃ　若林ら[13]による看護婦のイメージ(形容詞20)の第１因子は「有能性」因子で「知識の豊富な」「判断力のある」「責任感のある」「頭が良い」「気がきく」、第２因子は「天使」性因子で「美しい」「かわいい」「素敵な」「天使のような」「笑顔の」、第３因子は「頑強性」因子で「体力のある」「身体の丈夫な」「多忙な」「健康的な」「大変な」、第４因子は「陰険性」因子で「意地悪な」「冷たい」「恐ろしい」「きつい」「気が強い」であった。

以上Ａ，Ｂ，Ｃ，を比較すると「看護婦」イメージには差がある。ＳＣＴの内容をもう少し具体的に遠慮なく表現したのが若林らの「看護婦」イメージであり、固定化した看護婦像の表現をあえて控え、看護婦の行動レベルで表現しているのが教科書という印象を受けた。

「むずかしい」「厳しい」「有意義な」「つらい」「忙しい」は看護婦をターゲットにしたものである。「専門的な」は自立と服従、「科学的な」は理性的・理知的、「合理的な」は「理性的な」に読み替えることができる。「豊かな」は「人間性豊かな」と解釈した。「安楽な」は患者が安楽なという意味と解釈し、除外した。「真の」「適切な」は教科書の筆者の好みの表現として、除外した。

（２）自己質問表の設問

自己認知の水準として次の６つ、自分にとっての現実自己（actual／self、以下ＡＳと略記)、自分にとっての理想自己(ideal／self、以下ISと略記)、両親にとっての現実自己(actul／parent、以下ＡＰと略記)、両親にとっての理想自己(ideal／parent以下、ＩＰと略記)、友人にとっての現実自己（actual／friend、以下ＡＦと略記)、友人にとっての理想自己（ideal／friend、以下ＩＦと略記）を取り上げた。具体的な設問は以下の通りである。

ＡＳ：「あなたは自分自身について、どのように思っていますか。自分から見た実際のあなたについてお答え下さい。」

ＩＳ：「あなたは、どのような自分でありたいと思いますか。あなたの理想とする自分についてお答え下さい。」

ＡＰ：「あなたの両親を思い浮かべて下さい。あなたは、両親からどのように見られていると思いますか。両親から見られた実際のあなたについてお答え下さい。」

ＩＰ：「あなたの両親を思い浮かべて下さい。あなたは、両親からどのような人間であって欲しいと思われているでしょうか。両親が期待する自分についてお答え下さい。」

ＡＦ：「クラスメートなど、同性の友人達を思い浮かべて下さい。あなたは、その友人達からどのように見ら

れていると思いますか。友人達から見られた実際のあなたについてお答え下さい。」

ＩＦ：「クラスメートなど、同性の友人達を思い浮かべて下さい。あなたは、その友人達からどのような人間であって欲しいと思われているでしょうか。友人達が期待する自分についてお答え下さい。」

なお、Higginsの用いた義務自己（ought self）については、理想自己との区別がつきにくいであろうこと、自己認知の水準が６つあるので質問項目が多量になり、被験者の混乱と疲労を招き、評定に集中できないであろうと判断し、省略した。義務については欧米と日本とでは文化的な差異が指摘されている[15]。日本の現代青年には比較的希薄であろうと予想されている義務自己だが、看護学生はどの程度の義務を感じているのかは明らかでない。

（３）得点付け手順

以上の６水準のそれぞれについてSelf-differential尺度（縮小版）の自己質問表に無記名で評定を求めた。20項目はそれぞれ「全くあてはまらない」を０、「非常によくあてはまる」を10とした11ポイント尺度となっている。中点は５である。

「空虚感」尺度（縮小版）

対象：県立Ａ看護学院１年生31名、２年生34名、３年生30名

時期：1994年11月下旬

目的：看護学生の空虚感を測定し、自己認知のずれとの関係性を探る。

（１）「空虚感」尺度（縮小版）の作製方法

質問紙は、堤[16]が予備調査をもとに宮下らの「疎外感尺度」と内田の「生活感情尺度」の一部を引用し作成した「むなしさ」感尺度を使用した。この尺度は、第１因子は無目的・無気力間の因子であり22項目、第２因子は孤独感因子で17項目、第３因子は否定的自己感因子で12項目、その他の因子が３項目、計54項目からなり、項目ー総得点間の相関がすべて有意であり、内的整合性も証明されている。利用しやすさを考慮し、30項目からなる縮小版を作成した。まず各因子負荷量が.40以上の項目を選び、その他の３項目は除外した。次に将来展望の項目、逆転項目のためポジティブな表現がしてある項目は残した結果、第１因子14項目、第２因子10項目、第３因子６項目の計30項目、そのうち逆転項目は７項目となった。30項目をランダムに配列し直し、自分に「非常にあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」までの４段階の評定を無記名で求めた。

（２）得点付け手順

各評定値は「非常にあてはまる」３点、「ややあてはまる」２点、「あまりあてはまらない」１点、「全くあてはまらない」０点とした。

（３）配慮したこと

Self-differential尺度の実施終了に続いて記入方法を説明した。質問項目と回答欄がやや離れているので番号を間違えないようにすることと、質問が２ページあるので記入漏れがないように注意を促した。

2　結果および考察

「職業的同一性テスト」

１）学年別の比較：横断調査　　（表２）

全学年では、早期完了が27%、同一性達成が 23%、早期完了・同一性達成が13%、モラトリアムが15%、同一性拡散が２%、否定的同一性が１%、その他が12%であった。学年が上がるに従って、同一性達成の割合が大きくなっているが、同一性達成と早期完了と同一性達成・早期完了の３カテゴリーを合わせた割合では（１年生60.6%、２年生62.9%、３年生65.6%）あまり変化はない。２年生はモラトリアムが他の学年に比べて多い。本格的な臨床実習を経験する２年生は、患者や医療従事者との相互関係を通して、自分の選択した看護について悩んだり、迷ったりしながら、自分の不確かな想いを克服しようと一生懸命努力していると考えられる。

２）昨年の１年生と今年２年生の比較：縦断調査　　（表３・４）

１年生の時に早期完了や同一性達成と回答した被験者は、２年生でも早期完了、同一性達成、早期完了・同一性達成の３カテゴリーのいずれかに回答しており、あまり変化はない。しかし、１年生でモラトリアムと回答した被験者は26.9%から２年生では11.5%に減少し、約半数は同一性達成や早期完了へと変化していた。１年生でどのカテゴリーにも属さず、「その他」と分類された２名は、２年生でも同様に「その他」のままであった。おそらく、この２名は現在看護学生ではあるけれども、看護学校という限定された社会の中で、自分らしさを模索し続けている状態だと考えられる。

３）昨年の１年生と今年の１年生の比較　　（表５）

カテゴリー別には差があるように見えるが、早期完了、同一性達成、早期完了・同一性達成をまとめてみると昨年は61.5%、今年は60.6%でほとんど変化はない。モラト

リアムは昨年が26.9%、今年が15.2%である。しかし、今年の「その他」にはモラトリアム・同一性達成、モラトリアム・早期完了、モラトリアム・否定的同一性と回答した被験者が9.1%含まれている。これらの人は多かれ少なかれいくつかの選択に迷っている状態にあると判断し、モラトリアムのカテゴリーに加えると、24.3%となり、昨年との差はほとんどなくなる。調査対象とした看護学校の1年生では、被験者の違いにかかわらず、職業的同一性は同様の結果を示した。このことは、今回横断的に行った調査について、今後縦断的調査を行った場合にも同様の結果が得られる可能性を示唆するものである。

4）平均値による差　（表6・7・8）

各学年ともほぼ似かよった平均値を示している。最も平均値が高いのは、同一性達成で3.40から3.88、2番目は早期完了で3.20から3.52、3番目はモラトリアムで2.31から2.88であった。この結果からは、明らかな学年間差は認められなかった。

「ＳＣＴ（看護学生版）」

看護学生版ＳＣＴにより、看護学生にとって友人や家族が重要な他者として存在していることや、重要と感じるものに学年変化があることが示唆された。

1）現実の自己認識として「私にとってつらいのは」という刺激語に対し、1年生は、友人との関係がうまくいかないこと、自分の存在を認めてもらえないことを、

表2　職業的同一性テスト（学年別）

	同一性達成	早期完了	同一性達成 早期完了	モラト リアム	同一性 拡散	否定性 同一性	その他	計
1年生	6	10	4	5	0	1	7	33
%	18.2	30.3	12.1	15.2	0	3	21.3	100
2年生	8	9	5	7	1	0	3	35
%	22.9	25.7	14.3	20	2.9	0	8.6	100
3年生	9	8	4	3	1	0	5	32
%	28.1	25	12.5	9.4	3.1	0	15.6	100
計	23	27	13	15	2	1	12	100
%	23	27	13	15	2	1	12	100

表3　職業的同一性テスト（昨年の1年生と今年の2年生全員）

	同一性達成	早期完了	同一性達成 早期完了	モラト リアム	同一性 拡散	否定性 同一性	その他	計
昨年の1年生	11	5	0	7	0	1	2	26
%	42.3	19.2	0	26.9	0	3.8	7.6	100
今年の2年生	8	9	5	7	1	0	3	35
%	22.9	25.7	14.3	20	2.9	0	8.6	100

表4　職業的同一性テスト　同一人物のみ26人（昨年の1年生と今年の2年生）

	同一性達成	早期完了	同一性達成 早期完了	モラト リアム	同一性 拡散	否定性 同一性	その他	計
昨年の1年生	11	5	0	7	0	1	2	26
%	42.3	19.2	0	26.9	0	3.8	7.7	100
今年の2年生	6	6	5	3	1	0	5	26
%	23.1	23.1	19.2	11.5	3.9	0	19.2	100

表5　職業的同一性テスト（昨年の1年生と今年の1年生）

	同一性達成	早期完了	同一性達成 早期完了	モラト リアム	同一性 拡散	否定性 同一性	その他	計
昨年の1年生	11	5	0	7	0	1	2	26
%	42.3	19.2	0	26.9	0	3.8	7.7	100
今年の1年生	6	10	4	5	0	1	7	33
%	18.2	30.3	12.1	15.2	0	3	21.2	100

表6　職業的同一性テスト　　(平均値)（n＝95)

	同一性達成	モラトリアム	早期完了	同一性拡散	否定的同一性
1　年　生	3.55	2.67	3.52	1.67	1.79
2　年　生	3.4	2.66	3.2	1.6	1.51
3　年　生	3.5	2.31	3.41	1.66	1.94

表7　職業的同一性テスト　　(平均値)

	同一性達成	モラトリアム	早期完了	同一性拡散	否定的同一性
昨年1年	3.88	2.88	3.27	1.65	1.49
今年2年	3.4	2.66	3.2	1.6	1.51

表8　職業的同一性テスト　　(平均値)

	同一性達成	モラトリアム	早期完了	同一性拡散	否定的同一性
昨年1年	3.88	2.88	3.27	1.65	1.46
今年1年	3.55	2.67	3.52	1.67	1.79

2年生は、自由時間が少なく、レポートや毎週のテスト、実習に追われ睡眠不足で疲労がたまることを、3年生は、人を傷つけたり、傷つけられたりすること、自分をわかってもらえないこと、何もできない自分であること、自分の欠点をまざまざと見せつけられること、周囲からプレッシャーを掛けられること、両親の気持ちを裏切り親を傷つけることをつらいと感じている。全学年共通して、友人や家族をなくすことをつらいとしている。

1年生は新たな環境での人間関係づくりが当面の課題であり、2年生は自由な時間が取れずに、精神的にも身体的にも慢性的な疲労状態にあるのではなかろうか。3年生は、実習などを通して、無力感や劣等感を感じる機会が増し、国家試験を前に心の重圧を感じているようである。

2）現実の自己認知として、「時々、私は」という刺激語に対し、全学年を通して、今の自分で良いのか、自分に自信が持てないという悩みや、自分が嫌になり、一人になりたい、このまま遠くへ行ってしまいたい、消えてしまいたい、何もかも投げ出したい、わけもなく沈んだ気持ちになり泣いてしまう、など情緒不安定な様子や、多くの学生がよく物思いにふける様子が示された。また、息が詰まりそう、すごく肩が凝る、何の理由もなく腹痛がくる（たぶん精神的なものと思う）といった身体症状を表す人もいた。イライラしたり、おこりっぽくなったり、わがままで自分勝手な自分が嫌になったり、劣等感におそわれるという人もいた。看護学校という進路を選んだことについて、これまで自分がやってきたことが本当に正しかったのか、本当に看護婦になれるのだろうか、これから生きていけるのか、どうしてこの道を選んだのだろうと、深く後悔することがある、ふと学校で勉強していることが嫌になる、こんな学校やめてしまいたい、大学生になれば地位も良くて楽しかっただろうにという人もあった。

ここのところは、これまで看護学生をテーマにした報告で最も看護教員を悩ましてきたところであろう。看護職を目指して入学してきたのに、どうもやる気がないようだとか、実習に不安があり患者さんの所へ行って話ができない、実習記録がまとめられないなどいろいろある。看護教員自身の意見としては、1993年に日本看護協会[17]が行った看護教育調査によれば「学生（社会的経験が少ない、成長の年代）に対する課題が大きすぎる。短時間に学習させているので理解に至らず、パターン化させた丸暗記が大部分と感じる。学生は、ハードなカリキュラムと厳しい実習指導者の指導の中ですさんでいく。すさんだ学生の相談にのれば『甘やかしている』、『厳しくして強くなってもらわなきゃいけない』と言われる。専門性を問う前に、人間としてどうあるべきかという非常に大切な部分が不足している学生が多い。学生寮があるため、生活と学業を切り離した指導ができない。学生の生活指導に要するエネルギーが多すぎる。学生が国家試験に落ちた場合の責任が学校や教官にかかってくるので、学校が高校の延長のようになり、学生を管理しないですむ部分まで管理しなくてはならなくなっている。どんなに理想的な教育を受けても、臨床に出て2、3カ月もすると学生時代の感動を忘れて、基本的な生活の援助をおろそかにして、診療の介助に傾いてしまう。大切な看護の中

核ともいうべきケアをおざなりにしているナース達が、学生には看護看護と言うが、こうした臨床と教育の場のギャップは広がるばかりだ。」

これまで看護学生が、なぜ心理的なストレスを受けるのかについては、あまり語られてこなかった。今回改めて学生の記述を見ると、青年期特有の自己実存に関する自分への問いと、社会化の過程でおこる必然的な心理的ストレスへの不安のように考えられる。

看護学生はテスト、レポート、実習記録などの提出物に加え、1学年が35人程度で3年間同じクラスという極めて濃密な対人関係の中にあり、しかもその約半数は学校に隣接した学生寮で生活している。当然のことながら、教師と学生、学生同士の評価的色彩は強くならざるを得ないであろう。必要以上に他者の目を意識しながら、自我を傷つけられないように、他者の自我を傷つけないように気を使っている様子が窺える。自分が悩んでいることを他者に知られることを恐れ、自分の殻に閉じこもって身動きできない状態とも言える。看護学生は、他者の目を現実自己よりも高い水準で捉えており、自らの姿が露呈することを非常に恐れているのではなかろうか。この様な、内なる他者への意識は、同種の目的を持った近密性の高い集団だからこそ容易に比較され、より意識されやすいと考えられる。果たして、この悩みの答えをどこに求めたら良いのだろうか。看護学生が自分たちの悩みを当然のこととして受けとめてもらえるか、また、社会化のストレスを看護教師が意識しているか否かにかかっているように思われる。看護教員自身からの指摘のように、看護教育制度や現在の医療体制の問題も大きく関わっており、一挙に解決するものとも思えない。問題は、一人一人の成長の過程をいかにていねいに見守っていけるかではなかろうか。学生も教師も、現実を否定するだけでなく、自分も含めて周囲の状況をよりよい方向へと変化させるという可能性を信じていたいものである。看護教師は、卒業後の学生の成長とその可能性を信じ、力づけていくべきであろう。

3)「将来、私は」の刺激語に対し、約半数から3分の2が看護職（看護婦、保健婦、養護教諭、地域での訪問看護など）をあげる一方で、幸せな結婚を望んでいた。1年生は、看護婦(12)、保健婦(4)、養護教諭(4)、看護教員(2)、助産婦(1)を職業としてあげる一方で、幸せな結婚(6)を望んでいた。2年生は、看護婦(18)、保健婦（1）で、幸せな家庭、母、お嫁さん、平凡な主婦など（8）であった。3年生は、看護婦(12)、保健婦(1)、助産婦(1)で、幸せになりたい(5)であった。看護婦を希望する人の中で、1年生は優しくて、強くて、優秀で、信頼される看護婦を、2年生は、患者の気持が少しでも理解できる、思いやりのある、信頼される、感性豊かでおだやかな、自分らしい看護婦を、3年生は訪問看護や専門看護婦、ホスピスの看護婦を希望する人もあり、心の優しい、思いやりのある看護婦で、人の役に立つ納得のいく仕事をして、人に頼られるようになりたいと希望していた。

4)「27歳の頃の私は」では、学生のほとんどが、結婚して子どもがいることを想定しており、仕事と家庭との両立を積極的に考えている人は少なかった。1年生では、仕事(4)、仕事と結婚(8)、結婚(5)、結婚と子ども(10)であり、2年生では、仕事(4)、仕事と結婚(8)、結婚(10)、結婚と子ども(5)であり、3年生は、仕事(4)、仕事と結婚(4)、結婚(7)、結婚と子ども(6)であった。( )内は人数　この結果から、看護学生が一女性としてのライフスタイルのなかに看護職をどう位置づけているのかという問題が生ずる。当然のことながら、現実の看護婦の就業状況を考えると、看護学校を卒業して、数年間は臨床看護婦として働き、結婚や出産を機に退職するケースが多いと考えられる(結婚出産離職型)。中には、育児を中断して、または、子どもの小学校入学を機に再就職するケース（育児中断再就職型）もある。看護学生が現時点でどこまで将来の予測ができるかは疑問だが、何がなんでも仕事を継続する（長期継続型）を貫くほどには、臨床現場の勤務の実状は整っていないことは確かである。また、家庭内での家事・育児の分担、保育施設や子どもが病気の時の一時預かりなど社会的手だてが不十分であることも不安材料である。学生が、仕事と家庭を両立させている看護婦の実例を見ることは少ないであろう。また、あってもそれは夜勤を含めた看護婦の労働条件を考えれば、多大な個人的努力を必要とすることとして学生の目に映るはずである。結局、看護学生は、不確定な要素はあるにしろ、仕事を継続できるとは考えておらず、そのことは社会の現状を見る限り、残念ながら妥当だと言わざるを得ない。

「Self-differential尺度（縮小版）」

1）Self-differential

（1）因子分析　6水準＊3因子　　(表9～表14)

6つの水準の自己についての評定をそれぞれ因子分析し、固有値1.00以上で直交解バリマックス回転を行った。その結果、1つの水準につき3因子ずつを抽出した。

それぞれの因子は、その尺度と因子負荷量から次のように命名した。ＡＳの第1は「配慮性」因子、第2は「陰

表9　ＡＳの因子分析　　バリマックス法

因子負荷量0.4以上のみ記載

NO	項　目	因子負荷量 第1因子	第2因子	第3因子
21	冷静な	0.601		
18	こまかい	0.582		
13	頼りない	−0.549	0.498	
9	真面目な	0.51		
19	優しい	0.465		
16	有能な	0.461		
11	深い	0.438		
6	敏感な	0.407		
2	明るい		−0.754	
5	暖かい		−0.643	−0.478
8	消極的な		0.535	
12	強気な		−0.481	
4	たくましい		−0.458	
6	敏感な		−0.42	
14	おおらかな			−0.813
10	気長な			−0.753
17	従順な			−0.657
7	丸い			−0.482
	固有値	2.6	2.51	2.5
	寄与率（%）	13	12.6	12.5
	累積%	13	25.6	38.1

表10　ＩＳの因子分析　　バリマックス法

因子負荷量0.4以上のみ記載

NO	項　目	因子負荷量 第1因子	第2因子	第3因子
25	暖かい	0.828		
34	おおらかな	0.753		
39	優しい	0.676	−0.453	
30	気長な	0.598		
24	たくましい	0.525		
22	明るい	0.478		
31	深い	0.472		
27	丸い	0.455		
41	冷静な	0.405		
40	だらしない		0.737	
33	頼りない		0.705	
36	有能な		−0.599	
28	消極的な		0.524	
35	でしゃばりな		0.509	
38	こまかい			−0.879
37	従順な			−0.548
	固有値	3.68	2.56	1.42
	寄与率（%）	18.4	12.8	7.1
	累積%	18.4	31.2	38.3

表11　ＡＰの因子分析　　バリマックス法

因子負荷量0.4以上のみ記載

NO	項　目	因子負荷量 第1因子	第2因子	第3因子
47	丸い	0.737		
59	優しい	0.722		
45	暖かい	0.709		
50	気長な	0.629		
54	おおらかな	0.612		
57	従順な	0.606		
51	深い	0.567		
53	頼りない		0.646	
61	冷静な		−0.635	
56	有能な		−0.552	
58	こまかい		−0.507	
46	敏感な		−0.5	
49	真面目な		−0.409	
42	明るい			0.713
43	感情的な			0.503
48	消極的な			−0.483
44	たくましい		−0.422	0.48
42	強気な			0.433
55	でしゃばりな			0.411
	固有値	3.45	2.61	2.05
	寄与率（%）	17.2	13	10.2
	累積%	17.2	30.3	40.5

表12　ＩＰの因子分析　　バリマックス法

因子負荷量0.4以上のみ記載

NO	項　目	因子負荷量 第1因子	第2因子	第3因子
65	暖かい	0.835		
79	優しい	0.768		
74	おおらかな	0.663		
76	有能な	0.658		
64	たくましい	0.648		
62	明るい	0.628		
69	真面目な	0.556		
80	だらしのない	0.461		
67	丸い	0.419		
66	敏感な		0.78	
78	こまかい		0.555	
63	感情的な		0.456	
73	頼りない			0.571
75	でしゃばりな			0.57
68	消極的な			0.557
81	冷静な			−0.436
	固有値	4.22	1.98	1.88
	寄与率（%）	21.1	9.9	9.4
	累積%	21.1	31	40.4

表13　ＡＦの因子分析　　バリマックス法

因子負荷量0.4以上のみ記載

NO	項　目	因子負荷量 第1因子	第2因子	第3因子
94	おおらかな	0.799		
87	丸い	0.744		
90	気長な	0.675		
85	暖かい	0.658		
99	優しい	0.533		
97	従順な	0.47		
91	深い	0.424		
82	明るい		0.779	
84	たくましい		0.606	
88	消極的な		−0.581	
92	強気な		0.531	
93	頼りない		−0.521	0.481
86	敏感な		0.41	
83	感情的な		0.406	
96	有能な			−0.711
101	冷静な			−0.598
98	こまかい			−0.557
89	真面目な			−0.487
100	だらしのない			0.449
	固有値	3.05	2.84	2.4
	寄与率（%）	15.3	14.2	12
	累積%	15.3	29.5	41.5

表14　ＩＦの因子分析　　バリマックス法

因子負荷量0.4以上のみ記載

NO	項　目	因子負荷量 第1因子	第2因子	第3因子
105	暖かい	0.828		
119	優しい	0.727		
114	おおらかな	0.705		
104	たくましい	0.597		
102	明るい	0.558		
107	丸い	0.442		
108	消極的な	−0.42		
109	真面目な		−0.664	
121	冷静な		−0.628	
116	有能な		−0.535	
111	深い		−0.477	
110	気長な		−0.465	
117	従順な		−0.401	
106	敏感な			0.645
118	こまかな			0.624
112	強気な			0.544
103	感情的な			0.518
	固有値	3.28	2.31	1.87
	寄与率（%）	16.4	11.6	9.3
	累積%	16.4	28	37.3

鬱性」因子、第3は「陰険性」因子、ＩＳの第1は「情緒安定性」因子、第2は「未熟性」因子、第3は「反発性」因子、ＡＰの第1は「情緒安定性」因子、第2は「未熟性」因子、第3は「意欲性」因子、ＩＰの第1は「情緒安定性」因子、第2は「敏感性」因子、第3は「未熟性」因子、ＡＦの第1は「情緒安定性」因子、第2は「意欲性」因子、第3は「未熟性」因子、ＩＦの第1は「情緒安定性」因子、第2は「未熟性」因子、第3は「敏感性」因子である。それぞれ3因子の累積寄与率は40％前後であった。

（2）因子得点の学年差　(表15)

各因子得点の学年間差を見るために、平均値の差の検定（分散分析）を行った。その結果、ＡＦの第2因子，ＩＰの第1因子，ＡＰの第3因子、ＡＳの第2因子、ＡＰの第1因子で有意差があった。これらの有意差は、ほとんどが1年生と2・3年生の間の差として認められた。

この結果から、友人にとっての現実自己は学年が上がるに従って意欲的に捉えられており、両親にとっての理想自己は学年が上がるに従って情緒が安定していることが期待されていると言える。また、両親にとっての現実自己は1年から2年にかけては未熟性が強まり、2年から3年にかけて情緒安定性もマイナスの方向に傾くことが示唆された。このことは、看護学生が2年生からの本格的な臨床実習を通して、さまざまな人に出会い、経験をする事と関係すると考えられる。たとえば、患者との人間関係で自分の未熟性を発見したり、実際に行おうとするとうまくできない看護援助技術に悩んだり、実習記録がうまく書けず自信をなくしたり、不安になったりすることである。また、3年生として卒業研究や国家試験などの課題を抱え、他の看護学生と同じように勉強を続けなければ、と感じることとも関係するであろう。自分にとっての現実自己は1年から2年にかけて陰鬱性が弱まり、無意欲な状態からやや抜け出した状態と考えられた。1年生は基礎医学や一般教養、看護の概論などの学習が主であって、教室内での座学が中心となるため、変化が乏しいことが影響していると考えられる。2年生以降は、学校生活にも慣れるであろうし、授業も看護の各論や演習が次々とあって意欲が活性化されるのかもしれない。

2）Self-Discrepancy

（1）1項目毎6水準の比較　(表16)

6つの水準の自己についての評定の平均値を、肯定的－否定的の方向性の不明確な4項目を除く16項目について求めた。否定的項目の評定は（10－x）として算出した。その結果、ＡＳ：5.35、ＩＳ：7.55、ＡＰ：5.31、ＩＰ：7.84、ＡＦ：5.45、ＩＦ：7.15で、理想自己は現実

表15　各因子の学年差　平均値の差の検定

	平均値 1年生	2年生	3年生	F値	有意差
ＡＳ第1因子	−0.102	0.146	−0.061	−	
ＡＳ第2因子	0.291	−0.237	−0.033	2.82	1-2＊
ＡＳ第3因子	0.095	−0.115	0.032	−	
ＩＳ第1因子	−0.213	0.143	0.058	1.26	
ＩＳ第2因子	0.03	0.071	−0.111	−	
ＩＳ第3因子	0.15	−0.015	−0.138	−	
ＡＳ第1因子	−0.089	0.283	−0.228	2.72	2-3＊
ＡＰ第2因子	0.031	−0.052	0.027	−	
ＡＰ第3因子	−0.303	0.204	0.082	2.9	1-2＊
ＩＰ第1因子	−0.367	0.11	0.255	4.01	1-2*,1-3**
ＩＰ第2因子	−0.142	0.021	0.122	−	
ＩＰ第3因子	−0.113	0.07	0.037	−	
ＡＦ第1因子	−0.101	0.225	−0.15	1.56	
ＡＦ第2因子	−0.419	0.175	0.235	5.19	1-2**,1-3**
ＡＦ第3因子	0.048	−0.122	0.088	−	
ＩＦ第1因子	−0.135	0.06	0.071	−	
ＩＦ第2因子	0.068	0.104	−0.188	1.05	
ＩＦ第3因子	−0.226	0.191	0.017	1.94	

＊5％水準，＊＊1％水準で有意
自由度は(2.94)このときF表により、
p(F＞4.98)＝0.01　p(F＞3.15)＝0.05　p(F＞2.39)＝0.1

Self-differential尺度

表16　1項目あたりの平均値　(n＝95)

	平均値
ＡＳ；自分にとっての現実自己	5.35
ＩＳ；自分にとっての理想自己	7.55
ＡＰ；両親にとっての現実自己	5.31
ＩＰ；両親にとっての理想自己	7.84
ＡＦ；友人にとっての現実自己	5.45
ＩＦ；友人にとっての理想自己	7.15

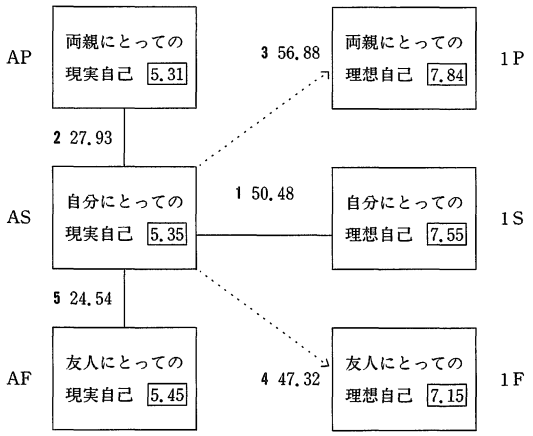
表17　Self-Discrepancyの総和平均値と標準偏差(n＝95)

		平均	標準偏差
1	ＡＳ－ＩＳ	50.48	22.53
2	ＡＳ－ＡＰ	27.93	11.58
3	ＡＳ－ＩＰ	56.88	23.58
4	ＡＳ－ＩＦ	47.32	22.43
5	ＡＳ－ＡＦ	24.54	10.43

表18　Self-Discrepancyの平均値の学年差　平均値の差の検定

	平均値 1年生	2年生	3年生	F値	有意差
1　ＡＳ－ＩＳ	51.936	45.971	54.083	1.121	
2　ＡＳ－ＡＰ	26.516	27.500	29.900	−	
3　ＡＳ－ＩＰ	56.516	53.000	61.667	1.068	
4　ＡＳ－ＩＦ	48.065	42.735	51.750	1.307	
5　ＡＳ－ＡＦ	23.000	25.529	25.000	−	

すべて有意差なし
自由度は(2.94)、このときF表によりp(F＞2.39)＝0.1



例) 1.23 Self-differential尺度１項目あたりの平均値

図１　自分にとっての現実自己と５水準のずれ(1)

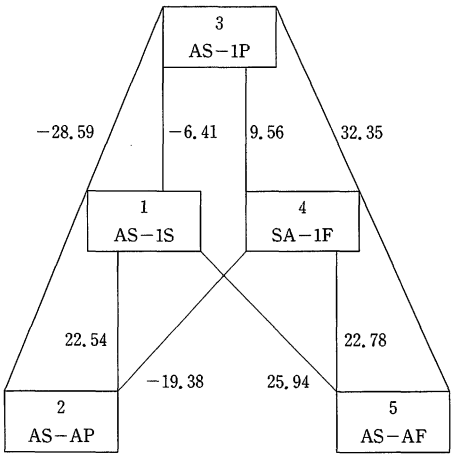


図２　Self-Discrepancyの平均値の差

表19　Self-Discrepancyの平均値の差　平均値の差の検定

	1 AS−IS	2 AS−AP	3 AS−IP	4 AS−IF	5 AS−AF
1　AS−IS	−	22.54**	−6.41*	3.16	25.94**
2　AS−AP	−	−	−28.95**	−19.38**	3.40
3　AS−IP	−	−	−	9.56**	32.35**
4　AS−IF	−	−	−	−	22.78**
5　AS−AF	−	−	−	−	−

＊＊１％水準で有意，＊５％水準で有意

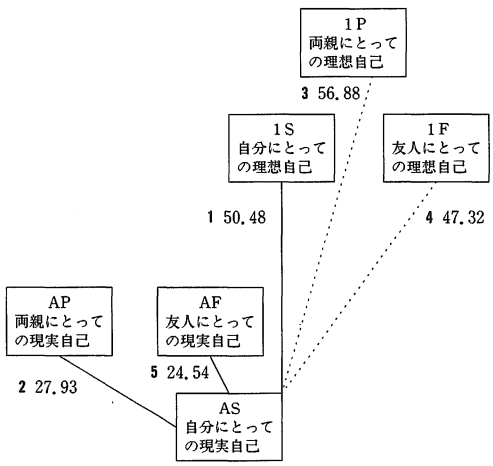


図３　自分にとっての現実自己と５水準のずれ(2)

自己よりいずれも肯定的であった。現実自己はいずれも中位であるのに対し、理想自己は高位であった。しかし、この値だけではこれ以上の比較ができないので、以下の分析では現実自己と５水準の差の絶対値を指標とする。

（２）現実自己と５水準のずれ（Self-Discrepancy）

（表17，図１）

現実自己と５水準の差の絶対値１＜ＡＳ－ＩＳ＞、２＜ＡＳ－ＡＰ＞、３＜ＡＳ－ＩＰ＞、４＜ＡＳ－ＩＦ＞、５＜ＡＳ－ＡＦ＞を個人指標としたことによって、肯定的な評定も否定的な評定も含めて、現実自己とのずれとして考えることが可能となった。

自分にとっての現実自己と各理想自己とのずれは、他者（両親、友人）にとっての現実自己とのずれよりも大きいことが示唆された。

（３）学年差　　（表18）

分散分析によって平均値の差の検定を行ったが、学年間の有意差はなかった。ただし、２年生では現実自己といずれの理想自己とのずれも縮まっている。

（４）Self－Discrepancy平均値の差

（表19，図２，図３）

５つの自己差異得点の相互関係を知るために、分散分析を行った。ほとんどの内部相関は有意であった。この結果から５つの自己差異には３つのレベルがあり、最も隔たりの大きいのは３＜ＡＳ－ＩＰ＞、次が１＜ＡＳ－ＩＳ＞と４＜ＡＳ－ＩＦ＞、最も隔たりの小さいのは２＜ＡＳ－ＡＰ＞と５＜ＡＳ－ＡＦ＞であることが示唆された。すなわち、看護学生は、両親にとっての理想自己を最も現実の自分と隔たったものとして捉えていることを示している。看護学生にとって、両親の理想は、自分や友人が理想と考えるものよりも、さらに高

いレベルのものとして位置づけられている。

「空虚感」尺度（縮小版）

1）空虚感3因子　(表20)

因子分析により3因子を抽出し、直交解バリマックス回転をした結果、堤の「むなしさ」感尺度とほとんど変わらない項目構成による3因子となった。累積寄与率は3因子で39%である。因子名は第1因子が「無力感」因子、第2因子が「孤独感」因子、第3因子が「否定的自己感」因子である。将来展望に関係した項目(no. 4、12、16、28)は「むなしさ」感尺度では第1因子であったが、今回の「空虚感」尺度では第3因子に含まれた。

2）学年差　(表21)

「空虚感」の学年差を知るために分散分析で平均値の差の検定を行った。その結果、「否定的自己感」因子は1年生と2年生の間で有意であった。「否定的自己感」は2年生になってやや弱まるものの、3年生では再び強まる方向へ傾く。「無力感」は学年が上がるに従って弱まる方向へ傾くのに対し、「孤独感」は学年が上がるに従って強まる方向に傾く。

Self-Discrepancyと「空虚感」

(表22, 図4)(表23, 24, 25)

Self-Discrepancyと「空虚感」の3つの因子との関係性を知るために、重回帰分析を行った。現実自己と友人から期待されているであろう理想自己のずれ4＜ＡＳ－ＩＦ＞は、「無力感」因子と5%水準で有意な回帰を示した。また、Self-Discrepancy全体は「否定的自己感」因子と1%水準で有意な回帰を示した。中でも、現実自己と自分が期待する理想自己とのずれ1＜ＡＳ－ＩＳ＞や、現実自己と友人から見られているであろう現実自己とのずれ5＜ＡＳ－ＡＦ＞に「否定的自己感」因子との関わりが大きいことが認められた。この様に、現実自己と理想自己のずれの意識は、「空虚感」との関わりを有するとの仮説は一部支持される結果となった。

現実自己と自分の理想自己とのずれ1＜ＡＳ－ＩＳ＞は、友人から見られているであろう現実自己とのずれ5＜ＡＳ－ＡＦ＞よりも高い値をとる。

表20　「空虚感」尺度因子分析　直交解バリマックス法

＊逆転項目

No.	項　　目	第1因子	第2因子	第3因子
21	毎日ただ何となく生きている気がする	0.819		
6	どうも日々の充実感に欠ける	0.751		
1	ただ何となく日々を過ごしている	0.749		
2	自分のやりたいことが何なのかはっきりしない	0.731		
18	何の目標もなく日々を暮らしている気がする	0.728		
11	毎日が同じことの繰り返しでとても退屈に思える	0.614		
8	日々の生活の中で熱中できることがあると感じる*	−0.465		0.413
20	毎日が忙しく充実している*	−0.463		
5	自分はいったい何になりたいのかよくわからない	0.419		
14	今特にやりたいことはない	0.409		
17	暇な時間ができてもなにをしていいかわからない	0.321		
22	みんなが冷たい目で私を見ているようだ		0.812	
25	自分はよく仲間はずれにされると思う		0.653	
19	友達と一緒にいてもふと孤独だと感じることがある		0.619	
3	私は一人ぼっちであると感じる		0.609	
9	自分のことを誰も気にとめていないと感じる		0.608	
15	友達の会話の中にうまくとけ込めていないと感じる		0.553	
7	私の友達は私のことを快く思っていないと感じることがある		0.483	
30	友人といた後一人になるととても寂しくなる		0.447	
26	まわりの人は楽しそうだと感じることがある		0.416	
27	自分は弱い人間だと思う		0.408	
29	将来の夢はしょせんかなわぬ夢だと思う		0.347	
24	自分はかけがえのない存在だと思う*			0.691
23	私は無用な人間だと思う			−0.64
10	私は何の役にも立たない人間だと思う			−0.596
13	私はみんなより劣っていると思う			−0.544
16	私は可能性に富む人間だと思う*			0.505
4	自分を必要としてくれる人がいると思う*			0.483
12	これからの人生はバラ色に輝いていると思う*			0.421
28	自分は将来の目標を達成するなら努力を惜しまない*			0.325
	固有値	4.57	4.19	2.95
	寄与率（%）	15.2	14	9.8
	累積寄与率（%）	15.2	29.2	39.0

表21　「空虚感」尺度の学年差　数値は因子得点の平均値

		1年生	2年生	3年生	F値	有意水準
第1因子	無力感	0.104	0.081	−0.2	＜1	
第2因子	孤独感	−0.075	−0.047	0.13	＜1	
第3因子	否定的自己	−0.197	0.251	−0.081	2.25	1-2＊

＊5％水準で有意
自由度(d, f)は(2, 94)このときF表によりP(F＞3.15)＝0.05, P(f＞2.39)＝0.1

表22　Self-Discrepancyと「空虚感」の相関関係　重回帰分析

	F値　有意水準		
	第1因子 無力感	第2因子 孤独感	第3因子 否定的自己
1　AS−IS	−	1.32	15.59＊＊
2　AS−AP	−	−	−
3　AS−IP	−	1.92	2.66
4　AS−IF	4.92*	−	−
5　AS−AF	2.41	−	6.00*

＊＊1％水準で有意，＊5％水準で有意
6.85…1％点，4.00…5％点

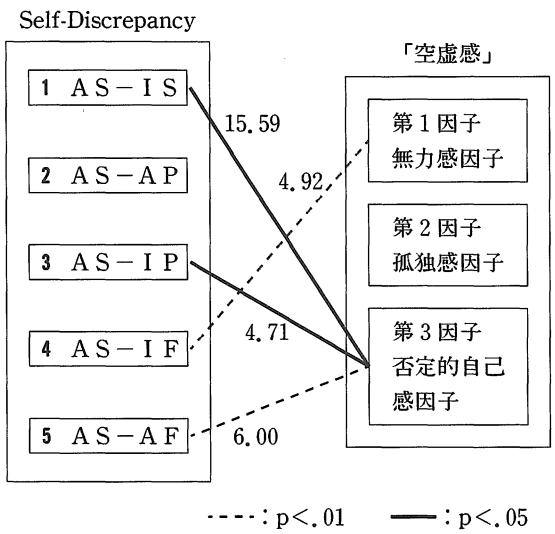


図4　Self-Discrepancyと「空虚感」の相関関係

両親や友人が期待する自己像よりも、自分が目指す理想の自己像の方がより重要な意味をもつが、同時に、友人にとっての現実の自己像も大きな意味をもつ。

Self-differential尺度の結果では、看護学生は、自分のことを情緒的に不安定で意欲はないが、未熟ではない(冷静で、頼りがいがあり、有能である）と捉えていのに対し、友人からは情緒的に安定していて、意欲はあるものの、未熟で頼りない存在と見られているだろうと感じている。つまり、現実自己の捉え方が自分と友人とでは違うということである。友人からは、自分のありのままを捉えられていない、と感じていることが否定的な自己感を強めていることが示唆された。

Ⅲ　調　査　2

現在の女子学生が将来の人生設計をどのくらいしているか、どうしようと考えているのかを知るために調査2を実施した。

1　方法

被験者：S県看護短期大学生
　　第1学年（平均年齢18.8歳）の女子学生74名
日時：1996年9月17日
調査方法：質問が書かれている冊子（2ページ）を、看護短期大学の講義時間内に配布し、回答を求めた。
質問紙：女性のライフスタイルと労働観に関する調査であることを冒頭に示し、フェイス・シートには性別、学年、年齢の記入を求めた。

質問紙には将来の人生設計について次の5つの質問を設けた。

表23　「空虚感」尺度の無力感因子得点を目的変数にした重回帰分析　(n＝95)

	偏回帰係数	標準偏回帰	F値	判定	T値	標準誤差	偏相関	単相関
4　AS−IF	0.01227	0.2902	4.9156	＊	2.2171	0.0055	0.2252	0.1621
5　AS−AF	−0.01847	−0.2031	2.4084		1.5519	0.0119	−0.1597	−0.201

判定　＊＊1％で有意，＊5％で有意　6.85…1％，4.00…5％点

決定係数　RR＝0.0511
自由度修正済決定係数　RR′＝0.0305
重相関係数　R＝0.2261
自由度修正済重相関係数　R′＝0.1746
赤池のＡＩＣＡＩ　ＡＩＣ＝262.53206

表24　「空虚感」尺度の否定的自己感因子得点を目的変数にした重回帰分析　(n＝95)

	偏回帰係数	標準偏回帰	F値	判定	T値	標準誤差	偏相関	単相関
1　AS−IS	−0.04233	−1.0646	15.59	＊＊	3.9484	0.0107	−0.3861	−0.2877
2　AS−AP	−0.00176	−0.0227	0.0235		0.01532	0.0115	−0.0162	−0.0302
3　AS−IP	0.01751	0.4619	2.66		1.6309	0.0107	0.1704	−0.1819
4　AS−IF	0.00658	0.1647	0.5703		0.7552	0.0087	0.0798	−0.1584
5　AS−AF	0.02977	0.3465	6.004	＊	2.4053	0.0122	0.2514	0.0353

判定　＊＊1％で有意，＊5％で有意　6.85…1％，4.00…5％点

決定係数　RR＝0.2091
自由度修正済決定係数　RR′＝0.1647
重相関係数　R＝0.4573
自由度修正済重相関係数　R′＝0.4058
赤池のＡＩＣＡＩ　ＡＩＣ＝240.42245

表25　「空虚感」尺度の否定的自己感因子得点を目的変数にした分散分析　(n＝95)

変動	偏差平方和	自由度	不偏分散	分散比	判定
全体変動	76.24811	94			
回帰による変動	15.94437	5	3.18887	4.70634	＊＊
回帰からの残差変動	60.374	89	0.67757		

判定　＊＊1％で有意，＊5％で有意　3.23…1％点，2.32…5％点

1）あなたは、卒業後の就職についてどう考えていますか。
2）あなたは、結婚についてどう考えていますか。
3）もし結婚した場合、あなたは仕事をどうするつもりですか。
4）あなたは、出産についてどう考えていますか。
5）もし出産した場合、あなたは仕事をどうするつもりですか。

以上5つの質問を読み、あらかじめ用意した選択肢の中から最も自分の考えに当てはまると思われる項目の選択をするよう求めた。

2　結果および考察

調査2の結果は以下のようになった。(表26～30)

この調査は看護短大1年生を対象に行ったが、「できれば就職するつもり」と答えた人は90.5％で、就職希望者が多かった。「わからない」と答えた人は9.5％であり、「就職するつもりはない」と答えた人はいなかった。結婚については、「結婚する」と答えた人は67.6％、「わからない」と答えた人は25.7％であった。出産については、「出産する」と答えた人は73.0％、「わからない」と答えた人は23.0％であった。これから、「結婚」よりも「出産」を現実的に考えており、「結婚願望」よりも「出産願望」の方が強いようであった。また、結婚後、出産後の仕事については、「仕事はやめる」と答えた人は結婚後では4.1％、出産後では6.8％と、あまり差はなかった。しかし、「仕事し続ける」人は結婚後では54.1％、出産後では17.6％であり、「一度仕事をやめ、再就職する」人は、結婚後では24.3％、出産後では60.8％であり差が見られた。

女性の生き方について、就職と結婚や出産を関連づけた質問をすることによって、代表的なライフコースに対する認識を知ることができる。次の①～⑧の選択肢が主に考えられる。

① 結婚しないで仕事を続ける。
② 就職し、結婚や出産の後も仕事を続ける。
③ 就職し、結婚を契機として専業主婦になる。
④ 就職し、結婚し、出産を契機として専業主婦になる。
⑤ 就職し、結婚して一時仕事をやめ、子育て後再就職する。
⑥ 就職し、結婚し、出産して一時仕事をやめ、子育て後再就職する。
⑦ 就職しないで結婚し、一生仕事には就かない。
⑧ その他

岡本ら[2)]のキャリアタイプをもとに①～⑧を分類した。①「未婚型」と⑦「不就業型」は全体的に少数であったため、⑧「その他」に加えた。

「就業継続型」……②（結婚や出産後も仕事を続ける）
「結婚退職型」…③、④（結婚や出産を契機に専業主婦となる）
「再就職型」…⑤、⑥（結婚や出産後一時仕事をやめ、子育て後再就職する）
「その他」……①、⑦、⑧

調査の結果をキャリアタイプで表すと、「就業継続型」が17.6%、「結婚退職型」が6.8%、「再就職型」が60.8%と「再就職型」がもっとも多いが、その中でも出産後再就職をしようと考えている人が多かった。看護学生の多くは、自分が将来結婚や出産で一時仕事を中断することがあっても、仕事を継続したいという意欲をもっていることがわかる。看護を学ぶ1年生にとって、夜勤を含め特殊な労働条件下にある看護婦の生活は、まだ現実的には感じられないであろう。しかし、結婚や出産・育児を伴うことで、その生活が多大な影響を受けることは十分に感じられているようである。

表26　就職について

できれば就職するつもりである。	67(90.5)
今はまだ考えていない。わからない。	7(9.5)
就職するつもりはない。	0(0.0)

表27　結婚について

できれば結婚するつもりである。	50(67.6)
今はまだ考えていない。わからない。	19(25.7)
結婚するつもりはない。	5(6.8)

表28　結婚後の仕事について

仕事し続ける	40(54.1)
仕事はやめる。	3(4.1)
一度仕事をやめ、一定の期間をおいて再び仕事につく。	18(24.3)
今はまだ考えていない。わからない。	13(17.6)

表28　結婚後の仕事について

仕事し続ける	40(54.1)
仕事はやめる。	3(4.1)
一度仕事をやめ、一定の期間をおいて再び仕事につく。	18(24.3)
今はまだ考えていない。わからない。	13(17.6)

表30　出産後の仕事について

仕事をし続ける。	13(17.6)
仕事はやめる。	5(6.8)
一度仕事をやめ、一定の期間をおいて再び仕事につく。	45(60.8)
今はまだ考えていない。わからない。	11(14.9)

単位：人（　）内は%

Ⅳ　実習レポートから見た看護学生の現実認知

看護学生が初めて入院患者に接し、話をしたり、身体的なケアを行っていく実習のレポートを通して、自分自身をどう捉えていこうとしているのかを見ていく。

看護学生にとって病院実習は、学校内の演習とは異なり、自分の計画どおりにいかないことの連続である。緊張しすぎてなかなか言葉がでなかったり、練習したはずのケアが全くできなかったり、患者と接したとき、思いもよらない相手の反応に戸惑いを感じたり、学生が自信喪失や挫折感を感じることも少なくない。これらの経験は、人に喜ばれる仕事を目指している学生にとって、大きな試練である。初めての病院実習で、まさに自分自身が試されるのである。一人一人が独自の存在である患者との関わりだからこそ、学生は現実の自分を認識する機会をもつことができる。

対象者：S看護短期大学第2学年生
時　期：1996年6月
実　習：基礎看護実習

実習レポート1

とにかく、Iさんは早く清拭を終わらせて欲しいようだった。清拭をしましょう、と呼びかけても拒否されたし、清拭中も「早く終わるのがいい。」としきりに言われて、なんだか自分はIさんに嫌われているんじゃないかな、と思った。たぶん、傷が痛いのに無理にやらされていることが気に入らなかったのだと思う。せっかく今までのマイナス面を補うつもりでこの清拭を計画したけれど、それはできなかった。背中を十分に蒸して気持ちよくなってもらいたかったけれど、そのことよりもIさんは早く苦痛から解放されたいという気持ちの方が強かったと思う。とにかく、残念だったし、自信をなくしてしまった。これを一つの教訓にして心に留めて、もっと良い方法がないか考える必要があると思う。でも、患者さんが嫌がったとしても、やらなければならないときは、心を鬼にしなければならないとも思う。今回はどうだったのだろう。

実習レポート2

氷枕は患者さんによって好みがあり、氷の大きいものの方が好まれるそうである。氷の角をとって（ゴツゴツしないように丸めて）から使うと学校では習ったが、実際にはそんな時間もとれないし、特に夏場は氷が速く解けるので角のある氷をそのまま使っているそうである。教科書は基本であるが、それが必ずしも全部に適応されるものではないことがよく理解できた。

実習レポート3

看護婦さんと一緒にシーツ交換を行ったが、てきぱきと上手にできなくて焦ってしまい、残念だった。看護婦さん同士で2つのベッドのシーツ交換をする間に、私はたった1つしかできなくて練習不足だと思った。なぜか緊張してしまって思うように手が動かなかった。どうして緊張したのだろうか。

実習レポート4

痛みに対して共感することの難しさを実感する。どこが痛いか、苦しいかを声をかけて尋ねることによってでも患者のつらさを外に出してあげられて、精神的に楽になれるのではないかと思った。何か気分を明るくする、痛みを忘れることができるような話題はないか、と考えたが、かえってつらさを助長させてしまったらしく、深く反省する。

実習レポート5

患者さんへの注意事項をすべて看護婦さんに言ってもらってしまった気がする。どうも私は言い出すタイミングがわからなくて、言いそびれてしまうことが多い。もっと積極的に言葉をかけられたらと思う。

実習レポート5

私は、患者さんの便で汚れている寝衣（寝間着）を見ながらも、それを無視したまま洗髪の話をしてしまった。自分でも「この寝衣を替えなくては」と思っていたが、なかなかすぐに「身体を拭いて着替えましょう。」とは言えなかった。もう少し相手の立場になって行動しなければとならないと思った。私は、自分が予定した計画を優先させていて、相手の状態を尊重する気持ちが足りないように思う。

Ⅴ　全体的考察

1　解釈

調査1について

1）職業同一性テストにより、60％強の看護学生は同一性達成または早期完了と分類された。1年生では約25％がモラトリアムであるが、学年の進行に伴い、同一性

達成などへ移行することが縦断調査により明らかになった。これによって研究予想１は支持された。

２）看護学生版ＳＣＴにより、看護学生にとって友人や家族が重要な他者として存在していることや、重要と感じるものに学年変化があることが示唆された。１年生は、友人との関係がうまくいかないことや、自分の存在を認めてもらえないことを、２年生は、自由時間が少なくレポート、テスト、実習に追われることを、３年生は、人を傷つけたり、傷つけられたりすることをつらいと感じている。全学年を通して、今の自分で良いのか、自分に自信が持てないという悩みや、一人になりたい、このまま遠くへ行ってしまいたい、何もかも投げ出したい、わけもなく泣いてしまう、など情緒不安定な様子や、よく物思いにふける様子が示された。また、将来の自分に対しては、約半数から３分の２が看護職（看護婦、保健婦、養護教諭、地域での訪問看護など）をあげる一方で、幸せな結婚を望んでいた。「27歳の頃の私は」では、学生のほとんどが、結婚して子どもがいることを想定しており、仕事と家庭との両立を積極的に考えている人は少なかった。

３）６水準の自己認知について因子分析し、さらに、学年比較をした結果、主に１年生から２年生にかけて自他の現実自己認知の変化が認められた。看護学生は、自分では無意欲な状態から抜け出して、友人からも意欲的に捉えられていると感じている。一方、両親からは、学年の進行に伴い看護学生の情緒が安定した状態になるのを期待されていると感じている。しかし、現実には未熟性が強まったと捉えられていると感じている。

４）６水準の自己認知間のずれを５つの自己差異得点で表し、これと「空虚感」尺度との相関関係をみた。その結果、自分にとっての現実自己（ＡＳ）とのずれは、両親や友人にとっての現実自己(ＡＰやＡＦ)とよりは、自分や友人にとっての理想自己（ＩＳやＩＦ）との間で大きく、両親にとっての理想自己（ＩＰ）との間でさらに大きかった。(図１参照) また、重回帰分析により、「空虚感」尺度と自己認知間のずれとの関係性をみた。無力感因子と否定的自己感因子は、自己認知感のずれと有意な回帰を示した。これによって、研究予測２は部分的に支持された。

看護学生は教育のなかで、自分の理想を模索しながら葛藤し続けている。情緒的に安定していて、意欲的に勉強するという理想像を描きながら、実際の学生は、自分はいったい何なのか、何のために生きているのかを改めて問わざるを得ない状況にある。むろん、それは看護実習において、実際に病気や死と直面している人々との関わりを通して印象づけられる、自己の無力感と関係が深い。学生は、自分の葛藤を何とかしたいと思いながら、自分特有の悩みとして孤独に耐えている。周囲にいる友人や両親との関係を重要と考える一方で、自分と他者との認知は必ずしも一致せず、また、自分自身の理想とも距離を感じている。それゆえ、否定的な自己感を感じやすいことが示唆された。学生が、今後多くの人との関わりによって、「今、現在の自分」を受け入れることができるほどに自我を成熟させることを見守らねばならない。

本研究は、県立の看護学校（３年課程）の看護学生を対象に行ったものである。現在の日本においては、看護学生の８割弱が短大や大学ではなく看護学校に在籍しているため、対象とした看護学校の規模や看護教員数、施設設備、学生寮などの条件は、ほぼ典型的といえるであろう。従って今回の結果は、多かれ少なかれ、どこの看護学生にもあてはまると考えられる。ただし、学校が地方都市にあるため、県内出身の学生がほとんどであり、卒業後の進路は県内が中心となること、周囲の環境は同年代の学生等が少ないこと、地方と都市部では看護職に対する社会的評価に差があることなどから、自分の将来展望の描き方は全く同じではないであろう。

調査２について

看護婦のキャリアタイプに関する調査では、看護婦という職業を見ている学生の存在を意識して、彼女たちが自分の将来をどのように考えているのかを探った。出産後の再就職を考えている学生は多かった。このことは、学生の立場では、まだ、周囲に就業継続者が少なくモデルを見つけにくい現状を考慮しなくてはならないだろう。仮にモデルがいたとしても，自己努力を強いられることへの抵抗や他者（親）の反対意見，社会的援助の不備などで揺らぐ可能性を含んでおり、今は現実的に考えられないという者もいると考えられる。しかし、さらに今後、現代の女性のライフスタイルの変化を受ける可能性もある。事実、看護婦の高学歴化によりキャリア意識が高まり，看護婦の就業は多様化する可能性が見え始めている。看護婦の就業場所の拡大、就業スタイルの変化、訪問看護婦、専門看護婦の誕生は、看護婦のキャリア志向を高めていくであろう。

2　研究の限界

自己概念の研究はこれまでさまざまな工夫がなされ、個人の実像に迫ろうとしてきた。今回おこなった自己評定は、１水準につき20項目の形容詞（20＊６＝120）に回

答を求めている。よく似た質問のため、被験者が最後まで気を抜かずに反応できたかどうかは検討の余地がある。また、6水準の自己評定値の差を、そのまま個人指標として用いることについては精神測定法上の問題として、今後検討せねばならない課題である。

3　今後の課題

職業同一性テストについては、今後も縦断調査を続け、学年変化を追っていくことが重要である。看護短期大学や看護大学の新設に合わせ、学校の種類による学生像の違いを見ていくことも可能である。看護学生版ＳＣＴでは、多くの看護学生の生の声に接することができた。看護教育との関連で、看護学生の特有の問題点を探っていったが、今後は社会の変化に伴い、看護の多様化が進むため、ますます問題が複雑になると予想される。つまり、これまで以上に理想を描くのが困難になっていくと考えられるからである。今後も、看護学生の自己像に迫りながら、人との関わりの中で成長する学生達を見守っていきたいと考える。

調査2は、島根大学教育学部社教文課程社会教育コースの松本政美さんが、平成8年度の卒業論文「大学生における女性のキャリアコース選択について」の中で実施した調査である。

引　用　文　献

1）エリクソンE・H，1950原著（小此木啓吾訳編），1973，自我同一性　－アイデンティティとライフ・サイクル，誠信書房.
2）岡本祐子・松下美和子編，1994，女性のためのライフスタイル心理学，福村出版.
3）日本看護協会，1991，日本看護協会調査報告　看護職員実態調査〈職場への定着をめぐる意識と実態〉，日本看護協会.
4）Kramer,M.，1974, *Reality Shock; Why nurses leave nursing*,C.V.Mosby.
5）南裕子，1990，看護婦のための看護婦　リエゾン精神看護の日本的方向性，精神科治療学，5（5），601－607.
6）上泉和子他，1994，新規採用看護婦のリアリティショック対策としての面接相談活動（コンサルテーション活動）の導入，看護管理，4(5)，335－342.
7）加藤和子，1994，効果的な看護システムの確立をめざして基礎教育と卒後教育の狭間で，看護管理，4(3)，171－175.
8）厚生省，1995，少子・高齢社会看護問題検討報告書，看護，47(2)，176－186.
9）松下由美子・荒木美千子・木村周，1993，看護学生の職業的同一性形成に関する研究　同一性地位面接による分析，神奈川県立衛生短期大学紀要，26，15－22.
10）田村文子・神郡博，1994，精神科実習でみられた看護学生のメンタルヘルス，看護教育，35(7)，528－533.
11）菅原郁子・三條裕子，1994，看護学生の臨床実習後の精神的健康状態と自我状態・対処行動との関係，天使女子短期大学紀要，15，37－53.
12）長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎他，1966，自我の適応についての研究（1）—Self-Differential作製の試み—，東京教育大学教育学部紀要，12，85－106.
13）長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎他，1967，自我の適応についての研究（2）—Self-Differential作製—，東京教育大学教育学部紀要，13，59－84.
14）若林満・佐野幸子・水野智，1990，看護職キャリア発達看護学校入学1年後における職業環境認知の変化，名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科)，37，31－50.
15）向山泰代，1993，認知の発生と発達「抑うつ的自己表象の機能と構造」，行路社，231－245.
16）堤雅雄，1988，自己不安への一接近　—Higginsの自己差異理論を通して—，島根大学教育学部紀要（人文・社会科学編），22(2)，127－132.
17）日本看護協会，1993，看護教育調査研究報告，日本看護協会，38，105－123.

参　考　文　献

Alice M.K.，1993，Accord and Discord in Students' Images of Nursing, *Journal of Nursing Education*, 32(7)，309－317.
Fisher,J.D.，Nader,A.，Whitcher-Alagna,S.，1982，Recipient reactions to aid,A conceptual review, *Psychological Bulletin*，91，27－54.
藤田和夫，1988，看護職員の心身健康に関する研究，日本看護協会調査　研究報告，27，9－115.
藤田和夫，1994，病院看護職員の離職・定着に関する調査研究，日本看護協会調査研究報告，44，7－22.
古市裕一，1983，大学生の心理　自立とモラトリアムに

間にゆれる「第４章　汝自身を知れ－アイデンティティの達成と大学生－」，有斐閣選書.
後藤桂子，1986，新卒看護婦のリアリティショック対策としてのプリセプターシップ，看護展望，11(6)，589－591.
Higgins,E.T.，1987，Self-Discrepancy:A theory relating self and affect,*Psychological Review*，94(3)，319－340.
Higgins,E.T.，1989，Self-Discrepancy theory:What patterns of self-beliefs cause people to suffer?, *Advances in Experimental Social Psychology*，22，93－136.
井部俊子・上泉和子，1986，新卒看護婦のリアリティショック，看護展望，11(6)，568－574.
稲岡文昭・松野かほる・宮里和子，1983，看護婦にみられるBurn outとその要因に関する研究，日本看護学会第14回集録（看護管理），５－８.
稲岡文昭，1988，Burnoutに導く職場の心理的・対人的要因の根源－事例・面接・観察法を通して－，看護研究，21(2)，173－179.
井上幸子・平山朝子・金子道子，1992，看護学体系第１巻看護とは「１」，日本看護協会出版会.
井上幸子・平山朝子・金子道子，1992，看護学体系第２巻看護とは「２」，日本看護協会出版会.
梶田叡一，1988，自己意識の心理学(第２版)，東京大学出版会.
梶田叡一，1985，子どもの自己概念と教育，東京大学出版会.
加藤隆勝，1977，青年期における自己意識の構造，東京大学出版会11－13.
小池明子・矢野正子，1992，新版看護学全書第13巻基礎看護学１　看護学概論，メヂカルフレンド社.
小島禮子，1975，看護学生の職業意識の形成に関する研究，看護研究，8(1)，46－61.
久保真人・田尾雅夫，1991，バーンアウト－概念と症状，因果関係について－，心理学評論，34(３)，412－431.
久保真人・田尾雅夫，1992，バーンアウトの測定，心理学評論，35(3)，361－376.
Marcia,J.E.，1966，Development and validation of Ego－identity status,*Journal of Personal and Social Psychology*，３，551－558.
Maslach,C.,Jackson,S.E.，1981，The measurement of experienced burn out,*Journal of occupational behavior*，２，99－113.
南裕子，1988，看護婦の精神的健康とストレスおよびソーシャル・サポートについて，看護，40(4)，44－64.
無藤清子，1979，「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性，教育心理学研究，27(3)，178－187.
無藤清子，1993，青年期とアイデンティティ　「自分」を、そして「ひと」を、確かに感じとること，こころの科学，53，47－51.
永田博・近藤益子・小川節子，1994，看護学生における対人関係価値の学年変化　縦断的研究法による内的妥当性の検討，看護研究，27(1)，41－48.
永田博・近藤益子・小川節子，1994，看護学生における対人関係価値の学年変化－CASによる不安の程度と構造との関連，看護展望，19(3)，382－387.
永田博・近藤益子・小川節子，1994，看護教育従事者が看護婦や看護学生に求める対人関係価値，看護教育，35(7)，534－538.
中西信夫，1983，青年期の自我同一性地位に関する研究，大阪大学人間科学部10周年記念論集，紀要，397－453.
日本看護協会調査研究室，1991，日本看護協会調査研究報告看護職員実態調査＜職場への定着をめぐる意識と実態＞，日本看護協会.
西川正之・高木修，1990，援助がもたらす自尊心への脅威が被援助者の反応に及ぼす効果，実験社会心理学研究，30(2)，123－132.
小此木啓吾編，1974，アイデンティティ，現代のエスプリ，78，至文堂.
小此木啓吾，1978，モラトリアム人間の時代，中央公論社.
堤雅雄，1995，矛盾する心－青年期心性の理解のために－空虚感，晃洋書房.
若林満・佐野幸子・水野智，1989，看護学生の職業環境の認知：看護婦・医師・患者・病院に対するイメージの分析を通じて，名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），36，121－137.
若林満・水野智・佐野幸子，1990，看護職キャリア発達－看護学校入学１年後における職業環境認知の変化，名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科)，37，31－50.
若林満・水野智・佐野幸子，1991，看護職キャリア発達(2)－看護学校入学後２年間における職業環境認知の変化－，名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科)，38，47－65.
吉田時子・前田マスヨ監修，1991，標準看護学講座第12巻基礎看護学１　看護学概論，金原出版.